

令和2年度境港市総合教育会議  
会議録

令和2年11月26日



伊達市長

それでは、本日の協議・調整事項に入りたいと思います。先ず保護者にとって一番の関心事でもあります学力向上について、事務局から説明をお願いします。

※事務局から資料に基づき説明

伊達市長

ただいま事務局の方から説明がありましたが、ご質問等あればお願いします。

十河委員

子どもたちの学力向上のために小学校、中学校のキャリア教育、情報教育、食育、環境教育、国際理解教育等、学校には多くのことが求められるようになっていますが、学校だけでは限界があって、地域全体で学校教育を支援する体制づくりが必要だと思います。学校と地域との連携と言われていますが、地域の自治会組織への未加入や子ども会活動への不参加等、地域とのつながりを避けようとする保護者もおられます。そのために地域や家庭での社会教育や生涯教育等、各種において学校教育が終了した後の学び、社会との関わりを育むようなきっかけや仕掛けづくりが必要なのではないかと思います。そうすることによって家庭学習の定着といったようなところが出てくるのではないかと思います。

伊達市長

十河委員から家庭学習の定着について意見がありましたが、学校によってバラつきがあったりするのですか。

柳樂補佐

学校間の差という部分は正直あります。例えば今回のCRTの結果等見ましても学力の差は出ており、子どもたちの家庭の状況についても学校によってずいぶん違う部分は正直あります。そういったところを踏まえて、どのように支えていくのかというところは大事なポイントで、放課後に子どもたちの宿題の支援という形で地域の力を借りている学校もあります。

伊達市長

具体的に支援を行っている学校はどこになるのですか。

柳樂補佐

放課後支援については、外江小学校が今年度白尾塾という形でスタートしています。また、上道小学校は土曜日に宿題の支援を実施してます。上道小については特徴がありまして、地域に外国語に長けた方がおられまして、希望があれば外国語の指導につい



おり、上道小も上がっています。それから中浜小の国語も上がっています。100には達していなくても、その母集団がすごく向上しているということは、ここに大きな指導のポイントが必ず潜んでいるのではないかと思いますので、その辺りを探ってみられると良いと思います。学校として、家庭学習の見守りを取り入れているというお話があったのですが、そういうところを参考にしながら学校間の見守りということをやっていくと良いと思います。数値の比較で私たちはダメなんだと思うのではなくて、そこは上げられるところなので、頑張っている教員をほめてあげて、みんなで見守ってあげるという気運を作ってほしいなと思います。

一つ気になるのですが、4年生の算数がすごく落ち込んでいるのですが、小学校3、4年というと少人数指導をしていると思います。その辺りの効果は出ていないのですか。

柳樂補佐

少人数指導につきましては、一律に2つに分けてというわけではなく、単元によってだったり、学校によってはつまずきが見られるお子さんを中心に編成したりというように、それぞれ状況に応じてクラス分けしていますので、決して効果がないということではないと思います。授業の中で一つの問題をやって、まとめをして、練習問題をするというようなことをやっているのですが、一つの問題でまとめるということは子どもにとって難しいので、「数字が変わったらどうなるのか」「もっと他に試してみたのか」たくさんやっていく部分も大事だと思いますので、「今日は考えることを中心に」「今日は習得することを中心に」というところはバランスを見ながらやっていく必要があると思います。質の部分については、先生方は非常に丁寧に指導されていますので、量の部分、例えば小数のたし算だったらどんな数字でもできるようになるということも大事なかなと思います。

渡邊委員

資料については全体的な点数でまとめたものになっているのですが、個々の点数を分布図にしてみる必要があると思います。どこをターゲットに授業を仕組んでいくのかというところが大事で、授業を仕組むときにターゲットを絞ることで効率がアップして、質的にも良い授業ができる、テストの点も上がることになるのではないかと思います。

柳樂補佐

その点について、ある学校の同じ学年で一方はベテランの先生、

もう一方は新任の先生のクラスで、平均点はほぼ同じだったので、分布にしてみると中身は全く違うということがありました。ベテランの先生のクラスは支援がうまくいって、個々の差が縮まってきており、新卒の先生のクラスはできる子とそうでない子の差がはっきりしていましたが、クラス全体の平均で見ると同じように見えてしまいます。そこは非常に大事なところで、注意が必要だと思います。

渡邊委員

力の入れ具合の部分で平均というのはすごくあいまいなところだと思いますので、よろしくお願いします。

伊達市長

渡邊委員から最初に話があった向上しているところの指導のポイントの共有という部分については、教育委員会としてどのように考えておられますか。

柳樂補佐

伸びが見られる学級というのは、各先生の学級経営という部分が抜群に良くて、何が違うかと言うと、一人ひとりこぼさないというところがすごく徹底されています。配慮を要するお子さんもいるのですが、逆にその子を核に子どもたちをまとめながら力をつけています。新学習指導要領では何ができるようになるのかという部分が問われているのですが、本当にこの子どもたちに力をつけるという熱の部分が非常に高いと思っています。そういった先生方の力を例えば同じ学年の先生、もっと言えば他学年にも効果が出るような仕組みを考えていく時期に来ているのかなと思います。教科担任制も少しずつ入ってきていますので、力のある先生がいろいろなところに出かけてということも効果があると考えています。

松本教育長

渡小学校におられる野川先生は鳥取県のエキスパート教員に認定されており、渡小学校では子どもたちが学習に集中しきれないという課題もあるのですが、野川学級は違って、先生のこだわり、ここは頑張らなくてはいけないというルールが子どもたちに染み込んでいて、すごく秩序があって、他の学年とは違った成績になっています。うれしいのは、若い先生方が野川流の学習の仕方を学ぼうとして、良い部分をまねされています。こういった環境が必要なのかなと思います。

伊達市長 各校にそういう先生がおられると良いのですが、学校間で学力格差があるというのは困りますね。

十河委員 保護者的には学校間で差があるというのは、学力保証ではないですが、境港市の学校に預けている限りはきちんとしてほしいという気持ちはあります。

渡邊委員 一中也上がっていますよね。中学校は教科担任制なので学級担任だけの力ではないとなると、学校の中でのチームワークや先生方の意思の疎通が良くて、どの教科も上がっているのかなということを感じます。

松本教育長 一中の伝統として、学習に向かう力がすごく強いということがあります。他の中学校にはない雰囲気があって、それが力を伸ばしているということを感じています。境小が総合的な学習に力を入れており、探究心がすごく鍛えられますので、そういったことも一中の伝統に引き継がれているのかなと思います。

中田委員 具体策が欲しいですね。分析はするけど具体的にどうするのかというところで、先ほどから話が出ている学校間で差があるということは非常に残念なことで、あの先生がいたのでラッキー、いないのでアンラッキーということではダメだと思いますので、それを解消するためにはどうしたら良いかというところで、突き詰めて先生がどうしているのかというところをみんなで指導してもらいながら、研究してもらいたいですね。

松原局長 教職員集団の指導力のスキルアップの部分が課題なのかと思います。もちろん学校間の差はありますが、校内で子どもたちの課題を共有しながら、先生方の指導力も向上していくというところが相対関係にあるのかなと思います。もちろん具体的な方策の部分、チェックだけでなくアクションの部分もしっかり考えながらやっていきたいと思います。

徳永委員 小学校の教科担任制というのはこれからどんどん進んでいく感じなのですか。

松原局長 教科担任制についてはどんどん入ってきております。本市でも

英語教育を重点的にやっておりますので、英語専科という形でやっていますし、高学年にもこれから随時入ってきます。教職員の働き方改革という部分でも、担当教科を作っていくというところは効果がありますので、これからどんどん進んでくると思います。

松本教育長

国の方では、小学校の教科担任制を進めるために加配教員を増やそうという動きがあります。以前小学校で教科担任制をやっていたのは、中学校との連携の中で中学校の免許を持っている先生が小学校に出かけて行って授業を行うという工夫があって実施していたところがあったので、そんなところもうまくやっていかなといけないと思います。

徳永委員

準備をするのに5教科全部するのではなくて、3教科で良いとなれば、先生方も集中できると思いますし、子どもたちにとっても同じ先生だけでなく、いろいろな先生が授業に入ってくるということは良いことだと思います。国がやる、県がやるというのではなく、市で先行して進めてもらえたら良いと思います。

渡邊委員

GTECについて、令和元年の結果がすごく伸びていますが、ターゲットを絞って、勉強したというところが良かったのかと思いますが、そのポイントは何だったのでしょうか。

松本教育長

自分が中学校の現場にいたときに感じたのは、英語の授業は先生によってすごく差があるということでした。会話や関わり方を大切にして授業を組まれる先生と読み書きを中心として授業を展開する先生とがおられ、そういった部分は先生方の中でも課題になっていましたが、お互いに研究し合う中で、読み書き中心の教員もだんだん会話中心の楽しい授業づくりにシフトしていきましたので、その辺りの連携は境港でも英語が一番なのかなと思います。

伊達市長

ALTの効果はどうか。

松本教育長

大きいと思います。読み書きだけを中心にやってもALTが教室にいますので、そこを活かすためにどうしたら良いかというところを考え、自分自身の壁をやぶるということはあります。他の教科は教室に一人しか教員がいないので、自分のペースを変

えることがないので、そういった面でも良かったと思います。

境小学校の計画訪問に行った際に感じたのは、子どもたちの英語の力が伸びるだけではなくて、ALTがいることで教員のレベルが上がるということでした。小学校に英語が入るというニュースを聞いたときに5年経ったら小学校の先生方の何割かは英会話ができるようになるだろうと、ところが中学校は英語の教員しかできないだろうと、そこに差が出るなと感じました。今まさにそうになっていて、小学校の先生方はネイティブの英語を聞き取って反応されています。本市はALTが良い関わり方をしていますので、そこは強みだなと感じます。

伊達市長

学力向上についてはよろしいでしょうか（異議なし）。それではコミュニティ・スクールについて事務局より説明をお願いします。

※事務局から資料に基づき説明

伊達市長

事務局から説明をいただきましたが、私の方から聞かせていただいてもよろしいですか。地域の方の関わり、例えば一中でしたら学び、ふれあい、安心とそれぞれ応援団が分かれています。それぞれどんな人が関わっておられ、どれくらい的人数がおられるのか教えてください。

角本補佐

実際、中学校区ではそういったサポーターが少ない状況にあります。小学校の方は地域とつながっていて、見守り隊についても大半が小学校の方になります。登録についてこれから進めていくのですが、小学校のサポーターの方に同じ校区の中学校でもやっていただけないかというところで声掛けさせていただき、中学校区のサポーターを増やしていきたいと考えております。誰が誰というところはまだきちんと把握できていませんので、今後進めていきたいと思っております。

伊達市長

例えば外江小の白尾塾でしたら、地域の方が外江公民館を会場として学習支援をしているというイメージで良いですか。一中もそういう人がいて、学習支援をしているというイメージで良いですか。

角本補佐

外江小の場合は地域の方とかコーディネーターの大学生のお子さんが指導しております。今年はコロナ禍の状況だったので、公民館ではなく、学校の空き教室を利用して実施しています。上道小は学校単位で動いてまして、中学校では学力支援は行っていません。

伊達市長

一中も三中も中学校区単位ではできていないということですね。

中田委員

一中校区については2月にコミュニティ・スクールを知ってもらうために集まってもらったのですが、温度差もあり、年齢的にも高齢者の方が多いということで、何をやっているのかというところがありました。上道の場合は公民館を核としてこれまでも活動をされていましたが、境の場合はやっている人も少なく、同じ人が同じような活動を被りながらやっていて、後継の方もおられないという状況でしたので、そこから派生するというのが難しいというのが実感です。

伊達市長

地域性も大きいということですかね。何かやりたいという方がおられれば、関わってもらった方が良いと思いますが。

中田委員

地域の方からというのも学校に対して遠慮がありますし、学校の方も地域に対する遠慮というところがあるみたいで、お互いにもっと声をかけてくれたら良いのにといいところが一中校区ではありますね。

渡邊委員

学校と地域の関わりについては難しいところがあって、地域はもっとやってあげたいけど学校が言ってくれないということがあって、学校はそこまでお願いすると自分たちが責められるのではないかといいところがあって、もう少し自分たちで頑張ろうという意識が働きますので、一緒に子どもたちを育てていくというのがコミュニティ・スクールの活動だと思いますが、その意識改革をしていくには本当に時間がかかることだと思います。まずは学校に気軽に行けるようにすること、学校は敷居が高いので、なかなかちょっと来たからといって、入ることができないと思いますので、そのところをどうやって広報し、垣根を低くしていくかだと思います。例えば、小学校だと「今日はかけ算九九の名人を決めたいので、地域の方を招待して見てもらおう」というよ

うな授業が仕組みやすいのですが、何か特別な行事をするということだと、学校の方も、地域の方も苦しくなってしまうので、学校の活動の中で少しずつ探し当てていくことが大事だと思います。あれもこれもではなくて、ターゲットを絞ってやっていけば、そんなに無理なくできるのではないかと思います。

中田委員

コミュニティ・スクールの最初の説明で「学校運営の評価、先生に対しての評価が言えるようになりました」というような文言があり、先生方にとっては警戒感につながるだろうなと違和感がありました。学校と地域と一緒にやることに対して、本来必要なことかもしれませんが、それを前面に出すのではなく、「こういったこともありますので地域みんなでやりましょう」というところを前面に出さないといけなかったのかなと思います。始まったばかりだったので、「各学校でこれをしないといけない」「なぜこれをコミュニティ・スクールでやるのか」という疑問もあって、先ずコミュニティ・スクールの在り方というところから考えた方が良かったのかなというところはあります。

渡邊委員

コミュニティ・スクールは、そうやって試行錯誤しながら作り上げていくというイメージなので、やってみてちょっとできたなという部分を少しずつ積み上げていくと良い感じで進んでいくのかなと思います。

中田委員

会議の中であれこれ言って変えてきた部分はあるのですが、この間の会議の中で岩本会長が説明されたと思いますが、学校と公民館の在り方で役割分担という部分でも教育委員会の中でも教育総務課と生涯学習課で担当が違うので、そのところでコミュニティ・スクールを実施するのにうまく意思疎通ができていたのだろうか、公民館を核とするとそれは生涯学習課ということになるので、今までと対応が変わってくる部分も出てくると思います。それは教育委員会の中でもっと話を詰めておいてもらわないと、うまく回っていかなくなるという話はさせてもらっています。

松本教育長

そういった反省は自分たちも感じている部分で、今年うれしく思っているのはそういった話合いが教育委員会内で行われるようになって、コミュニティ・スクールというところから言えば教育総務課が中心になって動いていたのですが、今は生涯学習も絡

んできて、会議には必ず生涯学習も一緒になって話し合うという良い形ができていますので、そこは期待しております。ただ、学校の現場を考えるとまだまだ改革が必要で、先ほど意識改革という話が出たのですが、一番意識改革が必要なのは学校の教員だと思います。教員は全部自分が解決しないといけないと思っています。英語のレベルが上がったというのはALTを上手に使えるようになったからで、それまではALTはお客さんで、ALTから「自分がいるのに何も仕事がない」と文句が出ていました。今は先生方が上手にALTとコラボしています。他の教科は外部指導者が来たら、教員が仕切ってしまうので、自分が監督になって役者を動かすと良いのですが、自分が役者になって動いてしまい、来た人は「何をすれば良いのか」となってしまいます。先ほどの野川先生は人をどんどん使うのが上手です。そういったことができる先生は何をするかではなく、子どもたちにどんな力をつけないといけないかというのが第一で、その次に何をするかということになります。その辺りの意識改革が教員には必要かなと思います。

伊達市長

言われたように、学校と地域の敷居を取り払わないといけないし、コミュニティ・スクールとは何かというところがまだ十分理解されていないところがあって、地域の方が気軽に入って来れるような体制づくりが必要なのかなど。

松本教育長

福井県は学校と地域の連携が濃くて、以前訪問させてもらった際に学校に地域の方が20人くらいおられて、お客さんが来られた際に地域の方が学校を案内され、教員は授業に集中されていました。ここまでは難しいと思いますが、敷居をどう取り払うかというところは課題ですね。

中田委員

ちょっと前の会の中で、学校の先生からの聞いた話ですが、意識が低いのは教員の方だ、CSって何？という感じだと聞いて、ショックを受けました。温度差が激しくて、担当の教員がおられてもちょっと他人ごとという感じで、対応もそんな感じでした。今は一生懸命されているのですが。

伊達市長

教員が理解してかかからないと、地域の方は理解できないでしょうね。

- 松本教育長 中学校の教員は、部活動で外部指導者が入っていますので、授業でも、いろいろな活動でも同じようにやれば良いのですが、なぜか自分で完結させてしまおうと思ってしまうところがあります。その意識改革が必要だと思いますし、できるようになるのではないかなと思います。
- 渡邊委員 学校の建物の中に公民館的な活動ができる部屋があると良いのですが。
- 中田委員 コーディネーターが一人しかいないということで、地域の核となる公民館がその役を担い、そこから地域の方にお問い合わせ、募集するとなれば、流れはスムーズだと思います。
- 松本教育長 それは理想的ですね。
- 伊達市長 公民館が核となり地域につなぐということになれば、その役は公民館主事さんになるのですかね。
- 中田委員 地域の方やサークルの方が集まって来られますので、そこで情報収集できると、本来コーディネーターが地域を歩いて情報をつなぐのですが、一人で歩いていてもなかなか情報が入りませんので、一中校区だったら、境公民館と上道公民館が核となって、地域の方をつなげたものを、コーディネーターさんが学校と調整してもらう形がベストなのかと思います。
- 松本教育長 公民館長はコミュニティ・スクールを意識されていても、主事さんまでは意識されてないかもしれませんが、その辺りはどうですか。
- 角本補佐 外江だと高梨さんが主事さんと話している姿を見えていますし、中浜だと金津さんが主事さんと話している姿を見かけます。
- 松本教育長 主事さんレベルと連携ができてくると良いと思います。
- 徳永委員 中浜の避難訓練はたまたま金津さんと志賀さんが公運審の委員なので、公民館が回したというのではなく、引っ張られて動いた

という感じでしたね。主事さんということだと、難しいのではないですかね。

中田委員

主事さんも含めて公民館なので、主事さんがというわけではなく、公民館がそういった場になるということで、核となってコーディネーター役もしながら、実際にはコーディネーターさんが最終調整するような形だと役割分担もしやすくなると思います。

松本教育長

いろいろな先生から聞いた話で、「ネットワークとは人と人とを結んでいる結び目であり、ネットワークを作らないといけない」、「それは人との関わりであって面ではない、面でやろうとするとうまくいかないの、いっぱい人と関わる紐を作っていけば、動く」というふうに言われました。今の話で少しずつネットワークを広げていくような努力をしないといけないかなと思います。

伊達市長

主事さんはサークルとかいろいろな方を知っておられるので良いと思います。

徳永委員

中浜だと各種団体協議会というのがあって、その中には幼稚園やPTA、青壮年会とかいろいろ入っていて、普段は正月の新春の集いでしか会わないのですが、この前はその方々が集まって会をしました。そこに主事さんは来られてなかったの、どうなのかなと思ったのですが。

中田委員

地域によって違うと思います。一中校区の場合はそこが必要になるのですが、他の地域の場合、既にそういったことができているかもしれませんし、一中校区、二中校区、三中校区ですべて同じでなくても良いと思いますが、一中校区については公民館が核となる方が良いのかなと感じています。

松本教育長

コミュニティ・スクールを始めたいと思った動機と今課題となっているものが重なっているのですが、自分が学校現場にいた時に学校が頑張っても限界だなと思ったのが、やはり家庭を巻き込まないと教育はできないということを感じました。「家庭教育とは何をすることか」と問われて、きちんと答えられる保護者は少なく、家庭教育とは子どもに必要な生活習慣をつけることなの

で、そこが境港の大きな課題だと思っています。生活習慣が定着していないので、指導が生きてこないということがあるのですが、今の話の中でも家庭は出てこないで、今後どのように家庭を巻き込んでいくのかが今の大きな課題だと思っています。

十河委員

私も保護者になって初めて自治会とか社会との関わりを持ったので、もし子どもがいなかったら、そういう関わりはなかったのかなと思います。今は先生だったり、いろいろな立場の方に「子どものためにはこういうことをしていかないといけない」ということを社会教育だったり、生涯学習だったり、ご指導いただいている状況なので、そういうことを発信していただき、それを保護者が受け止めていくような体制が必要ではないかなと思います。

松本教育長

保護者が社会に関わるチャンスは子ども会活動にあるのかなと、今は子ども会活動が低調になっていますが、昔は活動が盛んで、関わらざるを得ないような状況でしたので、そうした活動を通して社会とも関わってきたように思います。

十河委員

小学生になって初めてというのではなくて、先日のフォーラムの中でも雲南市の取り組みでありましたが、保育園、幼稚園、こども園で、そこから保護者としてスタートする、子どものためにこうしないといけないというふうに呼びかけていかないと保護者は育たないと思います。雲南市のように小中高までつなげていくと良いと思います。

松本教育長

中学生の関わり方で、中学生は地域の一員として活躍するレベルだと、余所の例で成功しているのは、地域の祭りを仕切るのを中学生に任せると地域に活気が出ると言われていています。そのような関わりもコミュニティ・スクールを通してできると子どもたちの生きがいもできてくるかなと思います。外江地区の市民運動会は100人近く中学生が来て、すごく活躍して、地域はその100人を全て使っているというところがすごいのですが、中学生も次の年も行きたいとなるので、その雰囲気すごいなと思います。

十河委員

中学生もそういうボランティアの経験をたくさんして、今回も

ケヤキ並木の清掃に渡と外江の生徒がたくさん参加されています。今回中学校3年生としてすごく活躍してくれたのですが、来年高校1年生となって、地域の住民として参加してほしいということを考えていて、今回の3年生にもそういった発信をしていかないといけないという話をPTAでもしています。

中田委員

コミュニティ・スクールに事業費をつけてもらいたいですね。何かしようと思ってもお金がないので、何ができるかというところ、今あるものを延長するしかない。一中校区の方では去年ゆるキャラを募集して、70くらい出てきたので、校区で使えるように今年著作権契約をしようと記念品と一緒に渡しました。記念品も予算がないので自腹を切ったのですが、返ってきたのが50くらいで、それを缶バッジにして、何か事業をやるときにそれをみんなに配っていきこうということにしました。一中校区のコミュニティ・スクールの名札も作って、ぶら下げてもらって、例えば朝の見守り隊に参加された際に「ありがとうございます」と缶バッジと一緒に渡して、勲章みたいな感じにしたいのですが、そういう活動をするにも予算がありません。会に出席する際の報酬等、立ち上げのための予算はついていますが、それ以降の予算がなくて、補助金も確認してもらったのですが、市で予算をつけてもらった方が良いのではないかということでした。今は企業から協賛金を集められないかということを考えています。

伊達市長

自治会に子どものためだと頼めば、出してもらえそうですが。

十河委員

最近は自治会も子ども会にはお金を渋るようになってきているので、厳しいかもしれませんね。お年寄りが増えていますので、子どもより自分たちに使ってほしいという声を聞きます。

伊達市長

その他ご意見がありませんか(なし)。いろいろご意見をいただきありがとうございます。いただいた意見は事務局の方でしっかり協議し、反映させていただきます。

それでは、本日予定しておりました協議・調整事項は以上となります。ありがとうございます。